『生まれる！』

新宮　虎太朗（喜劇のヒロイン）

◆登場人物

男１
男２
男３

アクリル越しに見える
赤ちゃんの入ったクーベス（保育器）は
私たちとは少し離れたところにある。

そのそばには男が立っている。
男は赤ん坊に話しかけているようであるが、それはつまり
赤ん坊以外に話す相手がいないということなのかもしれない
男、紙を読みながら

男Ｉ　当選おめでとう。ここは日本です。よかったね。衛生面では比較的にいいくじを引いたと思うぞ、君は今、どこにいる？
病院という建物の中の新生児室という部屋にいるね。壁と人に囲まれて生まれるのと
のっぱらで生まれるのとは訳が違う。君はもう日本人だ。困ったときは下を視ればいい。のっぱらで生まれた彼らを視ればいい。
見るか見ないかは君の自由だが、君がここに生まれた事実は自由じゃない。一度ここで生まれた君はもう他の場所で、
北欧とかで生まれることは出来ないんだ
そうだよ。やがて君は僕と同じように日本語を話すようになり、そして日本人になる。楽しみ？怖い？日本人になることは。

気づくと背後にチョッキを着た男２が

男２　動くな
男Ｉ　何だびっくりさせるなよ警備員じゃないか
男２　警備員をもっとリスペクトしろ！

男1　だったら、私もリスペクトしろ
男2　不審者をリスペクトしてどうする！
男1　わたしは不審者じゃない！
男2　じゃあ何だ言ってみろ
男1　医者だ。この病院の
男2　嘘をつけ！医者がこんな病院で何をしている
男1　・・・・。
男2　答えられないということは何もしていないということだな
男1　何もしてないことはない
男2　じゃあなんだ
男1　この状況で「私は医者です」以上の説明が必要か？

男2、発砲。

男2　お前は医者じゃない、不審者だ。いいか医者はすごいんだ！
男1　医者はリスペクトするんだな
男2　当たり前だ。俺はこの病院で警備員として働きながら多くのお医者さんを見てきたよ。どのお医者さんも長時間の労働と極度の疲労の中、自分のできる処置を全力で行っている。医者はな、すごいんだ。お前なんかがなれるわけがない。。
男　あのな本当に医者なんだ。

男2、発砲。

男2　私は医者を目指していたんだ。結局その夢はかなわなかったけどな。だから今は、警備員としてこの病院で働く人を守ることにしたんだ。

男１　立派だ
男２　誇り高き警備員に一人として逃すわけにはいかない。もう一度言う、いいか動くな

気づくと背後にチョッキを着て帽子を被った男３が

男３　お前が動くな
男２　え
男３　動くな
男２　何だ警備員じゃないか、声がでかいな
男１　え？
男３　お前、警備員をもっとリスペクトしろ
男２　だったら、俺もリスペクトしろ
男３　不審者をリスペクトしてどうする
男２　俺は警備員だ
男１　そうだよね？

白衣を着た男１・警備員を自称する男２
チョッキを着て警備員を自称する男３の３人が並んでいる

男３　お前、所属は？
男２　・・・ホリプロ。
男３　ホリプロ所属の警備員がいるわけないだろ！
男２　いまのは冗談だ

男1　警備員さん
男3　何だ！
男1　帰ってもいいですか？私はここの医者です
男3　ああ、どっかでみたことがあると思ったら、そうでしたか
男1　夜間の巡回中に突然この警備員に声を掛けられて
男3　お医者さん、こいつここの警備員じゃないですよ
男1　ですよね、ただの警備員なのに発砲を繰り返すからおかしいと思ったんです。
男2　ただの警備員とはなんだ、ただの警備員とは

男2、発砲する
男3、気にも留めず

男3　とにかくこいつは私が連れていきますので。先生はもう、動いていただいていいですよ
男1　あぁ。でしたら、私は戻ります。

男1は状況を男3に任せて去っていく

男2　あの
男3　なに
男2　もういいですか
男3　何が
男2　動いても
男3　ダメ、動くなって言ってんじゃん

男２　・・・。
男３　何しにきたの？
男２　え？
男３　こんなとこに何しにきたの？
男２　赤ん坊の顔を視にきました
男３　赤ん坊？赤ん坊って君の？
男２　いえ
男３　じゃあ、誰の
男２　それは知らないですけど、ここにいる赤ちゃんの顔を見に来ました
男３　あ、全員の？
男２　いまはまだ、彼らは日本に生まれたことを自覚してないはずです
男３　そうかな？
男２　顔を見ればわかります
男３　顔？
男２　日課なんです、この子たちの顔を見ながら。あーあ、生まれちゃったーって思うのが。
男３　・・・。
男２　思いませんか？警備員さん
男３　・・・いいよ
男２　え？
男３　動いていいよもう。・・出口わかる？
男２　はい。
男３　じゃあ、一人で行ってくれる？
男２　はい

男3　あと、もう来ないように
男2　それはちょっと・・・日課なんで

男2は去っていき、
男3だけが残る

アクリル越しに見える
赤ちゃんの入ったクーベス（保育器）は
私たちとは少し離れたところにある。
今、そのそばには男3が立っている。
すぐ近くには段ボール箱が。

男3　・・・・。（段ボール箱に赤ん坊をいれる）

チョッキを着た男2、男Ｉが現れる

２人　動くな
男3　・・なんだ警備員か
男Ｉ　警備員さんをもっとリスペクトしろ
男2　お前だったんだな、不審者は
男3　さっきまで君も不審者だっただろ
男2　さっきまではな、けど、今はお前が不審者だ

男1、男3と段ボールに入っている赤ん坊を見ながら

男1　それ、どうするつもり
男3　外国に送ります
男1　どうして
男3　ここにいたら不幸になる。
男2　同感だ
男3　あなたお医者さんじゃなかったんですか？
男1　白衣を着て医者を自称していただけです
男3　まぎらわしい
男1　警備員のフリをして、新生児室Ｃに侵入してきた、あなたに言われたくない
男3　「言われたくない」じゃなくて、あなたたちのまぎらわしさをまず認めてください
男1　どうまぎらわしいんですか
男3　（男2を指して）あなたは警備員のフリをした不審者のフリをしていたし、
（男1を指して）あなたは不審者のフリをした医者のフリをしていたってことでしょ？
男2　動くな
男3　動いてない！
男1　そうです。私と彼は不審者のフリをした医者のフリと、警備員のフリをした不審者のフリをして、この新生児室Ｃに入ってきました
男3　どう考えてもまぎらわしいのはそっちじゃないですか
男2　動くな
男3　動いてないでしょ
男2　動くなって言いたいんだ！
男3　知らねえよ。静かにしましょう、ここは新生児室Ｃだ

男１　そうだ、新生児室Ｃでは静かにしなきゃ
男２　あのさ、Ｃって何
男３　え？
男２　いやそのさっきから。新生児室Ｃ、新生児室Ｃって、
男１　この部屋の名前
男２　新生児室。じゃダメなの
男１　ダメだよ、だってそれじゃ、新生児室Ａの話なのか、Ｂの話なのか、Ｃの話なのか、わからないだろ
男２　隣は？
男３　新生児室Ｂです、その隣がＡ
男１　…なんで分けられてるんでしょうね
男２　ニッチみたいな？
男３　なんですかそれ
男２　生物学の言葉で、棲み分けみたいな意味です
男１　さらっと出てくるのかっこいいな
男３　何者なんですか？
男２　・・・
男１　あ、面白いこと言わなくていいと思いますよ
男２　すみません、生物学をかじってるというか、学者というか
男１　そういうときはかっこいい方でいいと思いますよ
男２　じゃあ学者かな。いやでも、かじってるというか、くわえてるというか
男３　あの
２人　？
男３　その…僕を捕まえるんじゃないですか

男1　捕まえる？
男3　警備員なんでしょ？
男2　警備員じゃないよ
男3　え
男2　警備員じゃないよ、俺たちは。
男1　ただ、あなたに一つ聞きたいことがあって。あの、なんで、赤ちゃん段ボールに入れたんですか？
男3　・・さっき言いましたよ

男2と男1、顔を合わせる

2人　すみません。もっかいお願いできますか
男3　不幸っていうか、ここで生まれたらいいことないじゃないですか
男2　ここってのは、新生児室Cのことですか
男3　いえ、日本のことです
男2　日本
男3　もちろん全部が悪いわけじゃないんです。ただ、相対的にあっちの国で生まれた方がきっと幸せになれると思って
男1　あっちって、どこに送ろうとしてたんですか？
男3　それは言えません。
男2　どうして
男3　迷惑がかかるからです
男1　誰に
男3　それも言えません。さあ捕まえてください
男2　どうします？

男1　どうします?って、僕らは警備員じゃないんだから捕まえられないでしょう
男2　そうだよな
男3　え、本当に警備員じゃないんですか?
2人　はい
男3　つまり、あなたたちは不審者のフリをした医者のフリをした警備員のフリをした不審者　と、警備員のフリをした不審者のフリをした警備員のフリをした不審者ってこと?
男2　はい
男3　まぎらわしすぎる
男1　ここにいる3人は不審者ってことです
男3　不審者が何しにきたんですか
男1　同志を探しに
男3　同志?同志って?
男2　あの、一緒に日本を変えませんか

ふたりが掛けていたタイマーが音を出し
その数秒後、部屋に警報が鳴り響く

男1　やばい、本物の警備員が来る
男3　本物の警備員?
男2　おい、逃げるよ
男3　え!(段ボールを見て)
男2　(それを見て)赤ちゃんを段ボールから戻して!
男3　でも

男１　いいから、急いで
男２　そっちじゃない！こっちから！
男１　３人は走る

男１　３人が逃げ込んだ先は、場末の定食屋
場末と言う言葉はなかなか死なない。
定食屋も飲み屋も旨くて心地よければそれでいいのに。
場末には、どこか他人への謙遜というか見栄が表れている。
場末なのにやっていけてる素晴らしい定食屋に３人はいる。
サバの味噌煮定食（サバの味噌煮・味噌汁・漬物・ひじき煮・冷奴・ご飯）７５０円を食べながら、３人

男３　あの、
男１　え
男３　なに、その独りよがりな長い文章、
男１　ト書きです
男３　ト書き？
男２　この人、脚本家だから
男１　ト書きって言うのは、トどこへ行った。とか、ト何をした。みたいな今後、僕らがどうするか、その説明で、
男３　説明って誰にむけて
男１　後から、これを読む人
男３　そんな人いるんですか？
男１　これから僕らが何をするかによるけどね
男３　これから何をするのか、なんにも分ってないですけど、ここは定食屋だからご飯食べればいいですよね、とりあえず

男2　旨いよね、ここ
男3　はい
男1　うん、旨いね
男3　てか旨い飯食ってて大丈夫なんですか
男2　何が？
男3　いや、病院から逃げてきたけど
男2　ああ大丈夫だよ、僕らは3人とも赤ん坊の将来を憂いていただけだから
男2　・・・。
男1　・・・。
男3　・・あの
男1　なに
男3　何するの、今から
男1　これ（スマホを取り出して、男2を仲介したりしなかったりして男3に渡す）この人知ってる？
男3　ああ、知ってますよ、僕ブロックされてるから
男1　え、そうなの？
男2　・・ブロックって何
男1　なんか、特定の人に投稿を見せない。みたいな
男2　何したら、そうなるの？
男3　時々、この人の投稿に反対意見を送ってたんですけど、そしたら向こうの投稿が見えなくなって
男1　へー
男2　じゃあさ、こいつの支持団体がいろんなところで騒ぎを起こしてるのも知ってる？
男3　はい
男2　俺ね、友達が襲われたの

男３　襲われた？
男２　うん、殴られたっていうか。リンチみたいになっちゃって
男３　はい
男２　でもね。友達は何にもしてないの。普通に仕事してたんだよ。それなのにこいつらは因縁つけて怒鳴り込んできて・・・無駄に拡声器とか使ってる人みたことあるでしょ？
男３　まあ
男２　あんなのがひっそりと、会社員してたりするわけ。すごく怖くない？
男３　まあ、
男１　ふつうだよね
男３　・・はい
男１　でも嫌じゃない？そんな普通
男３　まあ
男２　普通を変えようと思って
男３　・・どう変えるんですか？
男１　これから、僕らはこいつのパソコンからこいつのフリをして、謝罪文を投稿する
男３　え
男２　これまでに、こいつが投稿した暴力的だったり、過激な言動を撤回したあと、勝手にお詫びする。
男１　これをやれば、騙されて同じ思想になってる人が混乱して、良心を取り戻すんじゃないかって、そしたら変わるでしょ普通が
男３　え、いや
男１　ダメかな。やっぱり
男３　なんでそんなことするんですか？
男２　・・それは、、生きにくいと思うからだよ
男３　生きにくい？

男１　え、生きにくくない？なんとなく
男３　いや、まあそれなりに
男２　それなりか。じゃあ違うかったかもね。
男１　うん違うかったかな、
男３　何が
男１　君、赤ん坊を段ボールに入れていたからさ、てっきり、生きにくさを感じてるもんだと思って、声かけたんだけど違うかったか。
男３　…違ったか。じゃダメなんですか？
男２　さっきも君、新生児室 C で言ってただろ？この国で生まれると不幸になるって。それは君が今、幸せじゃないから出た言葉だと思っていたけど、
　それは違うかったか。
男３　本音なんて言えるわけないでしょ・こんな人がいっぱいいるところで。こいつの支持者だっているかもしれないんですよ
男２　確かに、それもそうだね。誰が聞いてるか分からない
男１　実際、もうすぐここにサバを食べに来る奴もいるし。
男３　え、誰ですか？
男１　来た

男１　ガラガラという音を立てて
　スマホに写っていた暴力的で過激な言動を繰り返す
　あの男が入ってくる
　あの男も僕も胃は同じ作りになっているのだろう
　主に味噌汁と白米と魚を食べる。

男２　サングラスしてるけど、あいつだ
男１　ダメだよ、あんまり見たら

男3　はじめてみた
男2　メニューみてるぞ
男1　定食屋なんだからみるだろ、普通
男3　味噌煮と塩焼きどっちにするか悩んでますよ
男2　Scomberの話？
男3　え？
男1　ほら、この人生物学やってるから
男3　学名で鯖を呼ぶ理由にはならないでしょ
男2　どっちだと思う？
男3　え？
男2　味噌煮と塩焼き
男1　いやあ味噌だと思うよ
男3　塩も美味しそうだけどな
男2　おいおい裏はドリンクだって
男1　まだ悩んでる
男3　悩んで、そして迷ってる
男1　味噌煮か塩焼きで迷うぐらいなら投稿するときに使う言葉を迷ってほしいよね
男3　それはそう
男2　それは別のものなんじゃない？
男3　あ、店員さん呼んだ
男2　・・・どっちだ
男3　分からないな
男2　あ！今…味噌…って言わなかった？口の動きみてたら、母音が「い」と「お」だったから

男1　じゃあ、、どっちだ？
男3　しおも、みそも、母音一緒だから
男2　あー！
男3　あー、じゃないでしょ。あの、これぶっちゃけどっちでもいくないですか？
男1　だね、ぶっちゃけどっちでもいいよね？
男2　あ！定食でてきたよ
男1　やけに早かったね、注文から15秒も経ってない
男3　あれは塩焼き？
男2　この店、塩焼きは売れないからストックがあるんだ
男3　ストック？
男2　昨日売れなかった塩焼き、一昨日作ったけど売れなかった塩焼き、その前の日も、その前の前の日も売れなかった塩焼きがストックされているんだよ
男1　焼くのを一旦やめればいいのに

3人が見ている男は配膳してくれた店員に向かって
笑顔で「ありがとう」と言った

男3　うわ…ありがとうとか言ってる
男2　外面はいいんだよ・・・このあとあの味噌汁で体があったまることすら、腹立たしいね
2人　たしかに
男1　く…脂の乗った腹の方から、美味そうに食べてる。
男3　…あの
男2　いや、僕は味噌煮にして正解だったと思ってるよ

男３　じゃなくて
男２　わかってる、
Ｓｃｏｍｂｅｒが残り３分の１になったら話しかけよう。
男３　なんでそのタイミングなんですか。
男２　飽きるからだよ。熱もなくなって、腹に比べて脂のない背中部分を食べ始めるタイミングだ
男２　あ、食べ終わったぞ
男３　言ってる間に食べ終わってるじゃん
男１　うるさい、行こう
男２　そうだ、君、殴らないようにね
男３　そっちこそ
男１　早く、行くぞ
男２　おう
男３　・・・誰も行かないの？
男２　君が行け
男３　え、行ってくださいよ。ほら、漬物も食べちゃいますよ。漬物食べて、温茶飲んだら帰りますよ。あいつ
男１　たしかに、人は食後に温茶を飲んだら帰るね
男２　おい、行くぞ
男３　だから行けよ
男１　行こう！
男３　はい
男２　よし
男２　・・・。
男３　・・・。

男１　……こわいね
男２　こわい。なんだな、きっとこの感情は
男３　怖がってたんだ
男２　なんでもいいから話しかけて気を引かないと
男１　…。
男２　…。
男３　あの！
２人　！！！。
男３　あの、ぼくたちファンなんです
男１　ええ、ファン
男２　送風機じゃなくて、あ、ごめんなさいなんでもないです、あの、先生のお考えに感銘していて、もちろんフォローもしています、僕たち、ああ。こんな場末の定食屋にいるなんて思いもしなかったので、思わず声をかけてしまいました・・。
男３　…。
男１　…面白いな君たち、うちに来ないか？
男３　え？
男２　いいんですか
男３　え？
男１　いいけど、お前は来るな？
男２　え？
男１　お前、さっきここを場末の定食屋って言ったろ？
男２　あ、いいましたっけ？
男１　あと、お前はなんで俺の言葉を繰り返すんだ？　あ、すみません
男３　ほんとうにいいんですか？

男2　あとでサインしてもらえますか？
男1　歩き出す3人

男1は卜書きを読み上げる

男1　3人はその後、過激な言葉を正義感を持って発信し続ける、ネット上で紆余曲折あった人々、略してウヨセツの家に向かった。
目の前にいる男はうじゃうじゃいるウヨセツの中でも、特にリーダーシップを発揮しており、彼の呼びかけに呼応したウヨセツたちは、公園のサッカーゴールをなぎ倒し、好きでもない虫の名前を連呼し、仮想敵相手に勝ち戦を続けたあげく、
署名運動で法律に敗れるなど、波瀾万丈だ。
しかし、翻って今、こちらに話しかけてくるその男の表情は穏やかであった。
暴力的な人間は自分自身が暴力的であるために外面だけはいい。彼の住んでいる家もまたそうだった。億ションにたじろぎながら、3人。

男1　何をたじろいでるんだ、さあ、入りなさい。だからなんで君は僕の言葉を繰り返すんだ・・すみません
男3　こんな要塞みたいな家、初めて見ました。
男2　ホントだね、入ったら出られなくなりそうだ
男3　先生は何者なんですか？
男1　大概の人間は、今、わたしのことを医者だと思っていると思う。けれど、それだけじゃない。私は弁護士にもなれれば、小説家でもある。タレントでもあり、宗教家でもあり、さらに政治家でもある。大成している仲間は皆、私と同じだ。わたしたちは私たちにしか見えない世界で正義を論じている。それを聞き入れないバカもいるが、私たちは私たちの視ている正義を信じてくれる同胞とともにこの国を変えようと思っている。私のファンだと言ってくれる君たちもそのうちの一人だ。さあ、コーヒーでも入れてやろう。少しそこで待っていなさい。って、ネット上で私の言葉を繰り返す同胞もいるが、君はすごいな。いつまで繰り返すつもりだ・・すみません・・ハハ、まあいい・・・

ウヨセツ（ネット上で紆余曲折あった人）は出ていく

男２　あの人にも親がいると思うと辛いよな
男３　誰が？・・親が？
男２　・・ごめん、雰囲気で喋った
男３　きっと、あいつに影響されて言葉への責任感が薄れてるんだよ。ほら自分の服の匂いかいで
男２　なんでああいう人ってちょっと匂いがきついんだろう
男３　あいつも自分の最初の匂いを思い出さないようにしてるんだよ
男１　あ！

ウヨセツのパソコンを探していた男１が
パソコンを見つける

男１　あったよ
男３　偽投稿とお詫び、ほんとにやるの？
男１　当たり前じゃん。
男２　でも、あいつ今、コーヒー淹れてくれてるんだよ？
男１　「あいつ」のニュアンスが友達みたいになってるぞ、
男３　たしかに
男１　もっと憎しみを込めろよ
男２　え、飲まないの？
男１　当たり前だろ、あんなやつのコーヒーなんか飲めるかよ
男２　飲めよ、出されたコーヒーくらい
男１　わかったよ。飲むから。それより、あいつが帰ってくる前にやらないと

男2　だから、コーヒーまで淹れてくれてる人の投稿。ぐちゃぐちゃにしていいのか、って言ってるんだよ。
男1　バカ、なんのためにこの家まで来たんだよ。あいつと同じ店でサバ味噌食べて、あいつん家来て、コーヒー飲んで、聖地巡礼じゃないんだぞ
男3　早くやろう
男2　・・僕はやらないから、
男3　それはもう、優しいとかじゃないからな
男2　違うの？
男3　うん。違うよそれは
男2　あの人にだって紆余曲折あったんだよ
男1　じゃあ、近づいてきたら教えてくれるだけでいいから。
男2　・・わかった
男3　よし、やろう
男1　まず。お詫びの文だけど
男3　うん
男1　これで行こうと思う
男3　なるほど

男2は部屋をうろちょろしている
男1・3はパソコンをカタカタしている。
うろちょろしていた男2はあるものを見つける

男2　おい
男1　なんだ、こっちは今、手が離せないんだ
男2　そんなに難しいことやってないだろ

男1　うるさい
男2　おい、こっち見てよ
男3　何だよ？
男2　いや、すごいもん見ちゃったよ。
男3　すごいもん？
男1　え、先生の卒アル？
男3　あ、ちょっと
男1　え？
男3　今、先生って。
男1　あ。（俺）あいつのこと先生って言ってた？
男3　気を付けて、考えが聖地巡礼寄りになってるから
男1　まずいな、あいつが注いでくれているコーヒーもどんなコーヒーか気になり始めてる
男2　気を付けないと僕ら、ここ出てまっさきにあの人の本とか買っちゃうね
男3　早いとこ、お詫び投稿してここを出ないと
男1　そうだな
男2　ねえ、これみてよ
男1　なになに
男3　ちょっと時間ないんだよ？

男2が指し示すのは、大きな爬虫類、
体長は2メートルほどだが、蛇のように体を曲げることでゲージの中におさまっている。

男1　・・なんだそいつ

男２　視たことないでしょ
男３　うん
男１　大きなトカゲ？
男２　あのねこいつ、ナンバンウバンバン
男３　ナンバン？
男１　ウバンバン？
男２　そう
男１　ナンバンウ？
男３　バンバン？
男１　ナン？
男３　バンウバンバン
男１　ナ？
男３　え？
男２　時間ないって！
男３　これは、トカゲ？
男２　うん、別名ヒトタベオオトカゲ
男１　ひとたべ？
男３　人を食べるんですか？
男２　食べるよ。基本的には雑食なんだけど日本人を好んで食べるんだ。そのせいで日本では殺処分対象になっている。だから、珍しい
男３　そんな外来種がなんでこんなところに
男２　先生が飼ってるんじゃないかな
男１　あれだけ排他的なくせに外来種飼ってるのかよ
男２　排他的だけど、外敵は好きですから

男3　ペットにも過激さを求めてるんだろうね
男1　異常だ。わざわざ外国から天敵連れてきて
男2　で、どうする？
男3　どうする？って？
男1　こいつを駆除するかどうかってこと？
男1　・・・。
男3　やめましょうよ、こいつには何の罪もない
男2　そうだよね
男1　とりあえず、投稿を済ませよう
男3　これ読んで
男2　詫び文、これまで、私は人の気持ちを考えず。自分の思い付きや思いやりのない思考を、現実的。効率的。という言葉でラベリングしたのち、自分に非が一切ないかのような物言いで、多くの人を傷つました。一連の投稿やわたくし自身、そして支持団体の活動により心に傷を負われた皆様にお詫びします。
男1　どう？
男2　いいと思うよ。
男1　よし、投稿するよ
男3　うん

投稿した。規約違反。

男1　やった！やってやったぞ！
男3　よかったですね
男1　うん。こいつのせいで、俺の劇団つぶれたんだ。

男３　え、
男１　劇中で実名こそ出してないけど、糾弾したんだよこいつらのやり方。ってか考え方を。そしたら誰がチクったのか知らないけどさ、炎上して、毎回そういう客が怒鳴り込むようになって。そりゃエゴサしたら簡単に見つかっちゃうしさ。潰れたんだ劇団
男３　そうだったんだ
男２　そんなことよりさ
男１　話題変えるときに「そんなことよりさ」は絶対に使うなよ
男２　こいつ解放してあげない？
男１　解放したら日本人食べられちゃうんだよね？
男２　毎年、数人の日本人観光客がこのナンバンウバンバンの被害に遭っている
男３　日本人大好きだな
男１　え、例えば。ライオンが食べるような鶏肉と宇宙服を着た日本人が目の前にあったら、どっち食べるの？
男２　宇宙服着てる日本人を骨まで食べます
男３　めっちゃ日本人好きだな
男２　だから殺処分対象なんだ、この国にいる限りは
男１　きっと、こいつらも生きづらいんだろうな
男２　僕らといっしょで？
男１　そうだな、お前らと一緒だ
男２　え
男３　あ！
男１　ウヨセツが入ってきていた。
　　自分の顔がプリントされたマグカップに
　　コーヒーを淹れている

男2　あ、コーヒーを投げてきた！危ない！
男1　わ！
男3　コーヒーは投げるものじゃないでしょうが！
男1　世の中には二種類の人間がいる、私にコーヒーを淹れられる人間と、コーヒーを投げられる・・だから真似すんなよ
男3　コーヒーを投げるなよ（と言いながらコーヒーを投げる）
男1　お前たち、そこの動物をみたのか？
男1　みたよ。爪が鋭くて、牙もあって、日本人を食べるって言う
男1　そうだ、あいつは日本人を好んで食べる。
男2　上下でやらなくていいよ！
男1　これは冗談だけど、食べさせてみようと思うよ、同胞のフリをして私の家までやってきた君たちをこの外来種に
男3　外来種って呼ぶな。連れてきたのはお前ら日本人だろ
男1　「お前ら日本人」って、おまえだって、日本人、
男3　黙れ。一緒にするな
男2　ほら、ナンバンウバンバンも怒って出てきたぞ
男1　檻の中にいるときは穏やかだったけど、結構怖いね
男3　え？
男1　え？
男1　なんで、檻が空いてるんだ
男2　あ、空いてる？
男3　やばいやばい！
男2　みんな！逃げろ！

飛び出すナンバンウバンバン
ウヨセツが食われる

男１　先生・・
男３　食われてる
男１　・・・
男２　・・・
男３　・・・
男２　よかったね、ω人とも喰われなくて
男１　脇腹から食べるんだ
男３　食べられながら、なんか言ってる
男２　コーヒー投げたときに、割れた器で戦ってる。
男１　命って感じがするね
男３　そうですね、でも、なんでまっさきに飛びついたんだろう
男１　たしかに。秒だったよね
男２　僕らより愛国心が強かったんじゃない？日本人味みたいな
２人　なるほどー。

ウヨセツはナンバンウバンバンに食べられている。
ナンバンウバンバンはウヨセツに殴られている。
３人はそれを眺めている。
檻にはナンバンウバンバンの卵。

男１　…先生、意識失っちゃったね
男２　脇腹から血がいっぱいでてるからしちゃってるから仕方ないよ
男３　あれは右足ですか、左足ですか
男２　左腕じゃない？
男３　…。
男１　先生の最後の言葉なんだった？
男３　おかあさん
男２　ものすごいベタだな
男３　死の間際にも存在するんですね、ベタは
男１　先生がお母さん呼んでる間もナンバンウバンバンずっと食べてたよ。おかあさん、ガブ。おかあさん、ガブ。おか、ガブだった
男３　目の当たりにしたから思うけど、ガブって擬音語は当てにならないね。グシャグシャ言ってる
男２　きっと、軟骨の割れる音だよ

３人血が飛んでくるので距離をとる

男３　人の血ってあんなに黒いんだ
男２　ナンバンウバンバンのも、混じってるけど
男１　え、手負いなの？ナンバンウバンバン
男２　先生が何か刺したんだよ。
男３　ほんとだ。自分の顔がプリントされたマグカップ刺してる
男２　あれにコーヒーを入れて来客に飲まそうとしてたのか
男１　ナンバンウバンバンにも痛覚はあるの？
男２　自分にあるものは他者にだって大概あるよ

男１　驕りを、人間の驕りを突くなよ
男２　ナンバンウバンバンも日本に来なければこんな目に遭わなかったのに。
男３　そうだよ、来なければよかったんだ、こんな国
男１　あんまりそういうこと言うと、生き返るよ先生
男２　視野の狭い愛国心パワーで？
男１　だから、やめなって
男２　大丈夫だよ、もう死んだから

死んだかどうか不安になって振り返る３人
眺めながら

男２　すこし食べるペース落ちてきたかな
男３　これ、寿司を５０貫食べるのとどっちがきついんだろう
男２　そりゃ、寿司だよ
男１　寿司か
男３　見てください。
男１　見てるよ
男３　段々とナンバンウバンバンも動かなくなってる
男１　…。
男２　…。
男２　まだ眺めてる？
男１　いや、もういいかな
男２　飽きた？

男1　え？もう少し眺める？
男2　いや、もういいかな
男3　これ見て、嬉しいとか、あんまり思っちゃいけないんですよね
男1　・・・。
男2　・・・仮にも2つの命が失われてるわけだからね
男1　取り返せるのかな、この傍観は
男3　見殺しにしてしまったことを悔いてるんですか？
男2　そもそもナンバンウバンバンの檻が開いていたのがいけないんだよ
男3　なんで開いていたんでしょうね

檻を見る。そこにある卵が目に入る。
ナンバンウバンバンの卵であることが想像される。

男2　ずっと見ないようにしてたけど、どうする
男1　え
男3　ああ。
男2　卵かな
男3　卵だね
男1　あれって、ナンバンウバンバンの卵なの？
男2　うん、模様が
男1　模様
男3　じゃあ、あの中にはここでマグカップ刺されて死んでるナンバンウバンバンの子どもがいるんだ
男1　このままあの卵置いて出ていったら、あの卵の中のやつも殺処分されちゃうんでしょ？

男２　うん
男３　でも生まれたら食べちゃうんでしょ？人を
男２　うん、人っていうか日本人を
男１　どうする？
男２　置いていくのはやめようよ。もう見殺しにはしたくない
男３　こいつ（卵）、どこかに連れていきませんか？
男２　え？
男３　俺たちと同じで生まれる場所が違えば、何の問題もないんですよね？
男２　そうだね、日本人がいなければ、普通の爬虫類だから
男１　そしたら連れてってあげようよ
男２　どこに
男３　生まれる卵が不幸にならないところに
男２　日本にいたら殺されちゃうもんね
男１　空港に走る３人

男１　３人が急いで向かったのは羽田第一ターミナル。
ここにいるどの人も、３人の抱える秘密には気づかない。
秘密を見抜く空港の機械は日常生活に類を見ない圧がある
その圧と機械の前で３人はペイントした卵を見せる。

搭乗口から飛行機の、魚で言えば鰓の部分に向けて伸びるタラップ？を通り、席に着いて３人

男２　これからどこに行くの？

男１　え、行き先見なかった？
男２　いや、ヒトの目気にしてたら全然見れなかった
男１　そっか
男３　卵、バレなかったですかね
男２　大丈夫でしょ
男３　でも、よくこれ、イースターエッグで、通用したよね
男２　ほんとだよ、色塗っただけで隠す気全くないもの
男１　にしても大きいな

３人は卵を眺める

男３　お前の生まれる場所を変えてやるよ
男１　あれ、ビーフと何聞かれるんだっけ
男２　え
男１　ビーフと何聞かれるんだっけ
男２　・・ミートじゃない？
男１　それだと、北海道オア日本　みたいになっちゃうから
男２　え、それは何の質問なの？
男１　何の質問でもないよ
男２　尖閣オア・・・
男１　あ。ちょっと静かにしろ、お前
男２　え、面白がってたとえ話増やしていく系じゃない？
男１　じゃないに決まってるじゃん。よくないよ

男3　昔なら朝鮮オア・・
男1　だからよくないって！
男2　何が良くないの？
男1　機内で領土の話をするのはナンセンスだろ
男2　最初に北海道出してきたのはそっちでしょ？
男1　北海道は日本だろ
男3　違いますよ
男1　違うの？
男3　あの、例えばカラスいますよね
男2　うん
男3　カラスの肉ってミートですか？
男1　食えないからミートじゃないでしょ？
男3　もし食べられたら？
男1　ミート
男3　はいこれって結局、ミート側の意思で決まりますよね
男1　ミート側？
男3　食べられる肉をミートって呼ぶ人たち
男2　え、で、どういうこと？
男3　北海道の人がいくら、自分らは日本だって主張しても北海道以外の日本人がそれを否定したら、北海道は日本じゃないんですよ
男2　つまり何が言いたいの
男3　今、部屋で死んでるあの先生はいつだって日本側に自分を置いていて苦手だったなぁ。
男1　ああ、それすごいわかる
男2　でも、今はもう関係ないよ

男3　そうだね、僕らはこいつの生まれる場所を探すことに夢中なんだった
男1　どこで生まれてもらおうか
男3　ここで生まれるのはやめてほしいですね
男1　動いてないようだけどこれは飛行機だから、ここ、は移動し続けてるんだよ
男3　あ、面倒くさいこと言ってる。
男2　てか、この飛行機はどこに向かってるの
男1　座席に座りつづける3人

男1　飛行機は雲の上にいる。雲の上は夜になっている
こちらが夜の時、地球の反対側は昼
つながっているようでつながっていないと思っていた空が世界につながっていたことに3人は気づく

男2　フ、
男3　フ、フ、
男2　フランスだった
男1　フランスだね
男3　フランスのどこですか
男2　フランスの・・フランス
男3　ちょっと黙っててください
男1　誰か、フランス語イける？（首を振る二人）

男1　3人はピクトグラムに助けられて出口へ向かう
ここパリ・シャルルドゴール空港の入国ゲート、

３人が困った顔をしていると博愛主義の税関は
何も問わず通過を許可してくれた、３人は大喜びで
ゲートを出る。どの国でもいつも空港の傍だけは
風が強く吹いている

男３　ねえ、何か聞こえません？
男１　聞こえる
男２　なにが
男３　地響きみたいな？
男２　聞こえないけど、それより何か煙たいよね
男１　たしかに
男３　向こうかな
男１　え
男２　あ、ちょっと待ってよ
男３　あっち、見に行きませんか？
男１　あの距離じゃ走っていくには遠いよ。
男２　じゃあタクシーだ
３人　「へい！タクシー！」

男１　日本人が避けられているのか、
自分たちが避けられているのか、
少数派になると私たちは
自分たちが嫌われる原因がわからなくなる。

４台目でやっととまってくれた運転手は日本好きだった
車内にはJPOPが流れていたが、彼が好きなのはきっとJPOPであり、日本ではない。そこを間違えると痛い目に合う。3人はこの曲を思い出せないでいる。

男２　誰だっけ、これ
男３　え、あれですよね、あれ
男２　どれだよ
男３　ちょっと、代名詞追及するの早くないですか
男２　誰も得しない代名詞使う方が悪いよ
男１　待ってこの声、聴いたことあるんだけど
男３　僕もですよ、誰だったっけな
男２　ちょっとおじさん、うちら、もうJPOPクイズわからないから、早く出発してよ

おっさんが喋る

男１　・・・何か言ってるよ
男３　あ、行き先伝えてないじゃん
男２　あ、そうだったね
男１　えっと、

出来得る英語かフランス語で行き先を伝えようとする

男３　動いた

男2　きっと伝わったんだ

タクシードライバーは2人に黄色いベストを渡す。

男1　何これ
男2　あ、人数分あるんだ
男3　え、めっちゃ持ってるよ
男1　おっさん、もういらないよ
男2　これ、何？着るの？
男1　ライフセーバーみたいな
男3　え、今から水辺に行くんですか？
男2　あれフランスって海あったっけ
男1　でも、これ膨らまないよね
男3　だから多分、普通のベストだね。
男1　こういうの交通整理員とかよく着てるよね
男3　たしかに
男2　あのさ
男3　はいはい
男2　はいはいじゃなくてさ
男1　どうしたの？
男2　あのさ、さっき無視したでしょ
男3　え
男2　フランスって海あったけ？っていう

男1　ボケ？
男2　ボケじゃない、質問
男3　あのね、海はあるよ
男2　あ、あるんだ
男3　うん
男1　フランスは海があるからこんな感じなんでしょ？
男2　こんな感じって？
男3　色んな人が住んでる
男2　色んな人って？
男3　色んな人だよ
男2　ぼわっとしてるな
男3　それは日本だって同じでしょ？
男2　まあね

タクシーのおやじが曲を変える

男3　あ、曲変えた。これ、えっと
男1　あれー、なんだっけ秋元康絡んでる？
男3　絡んでない
男2　違う違うあれだよ。あの、あれだよあれ
男3　あれってなんだよ
男2　あ、これ自分がされるとイラつくね
男3　だから、代名詞追及すんのやめた方が良いですよ

男２　そうだね、これからは代名詞のぼわっと感を楽しむわ
男１　タクシーで向かう３人

男１　煙の下へ近づけば近づくほど煙は黒くなり、
地響きは圧力を増していていく
やがてその地響きが人の声だということがわかる。
タクシーのオヤジも声を荒げはじめ、
クラクションを楽器のように使い始める

男２　おい、じじいおろしてくれ
男１　じじい、って失礼だろ！
男２　見るからにジジイだろ！
男１　それでも礼は尽くせよ！せめて、おっさんだ
男２　そんなこと言ってる場合かよ、なんだここ！
男３　デモだ
男２　デモ？
男３　うん、
男１　おい、オヤジが何か言ってる
男３　あ！お金じゃない？
男２　お金ね、はいはい
男１　ああ・・・え、要らない？
男２　あ、降りたぞおやじ
男１　ちょっと、タクシーどうすんの。

男３　とりあえず、降りようか
男２　うん

３人は黄色いベストを着てタクシーから出てくる

男３　なんだこれ
男２　・・・人の量がすごいね
男１　これ、全員デモの人？
男２　たぶん
男３　人で道が埋まってる
男１　・・・
男２　・・・
男３　・・・
男１　・・この人たちはほんとに変えたいんだな
男２　何を
男３　国を
男１　だって・・・こんなの、視たことある？
男２　デモはあるよ、日本でも
男１　それは、先生の後援団体とかの小さなデモでしょ
男２　うん
男１　そんなじゃなくてさ
男３　大きさじゃないと思いますよ
男１　ん、何が？

男3　傷ついてる人もいるから
男2　うん、俺もそう思うよ
男1　あ、ごめん無関心で
男3　それ謝ってるんですか？
男2　あ、危ない！

男1　何かデモ隊の投げたものが3人の近くに飛んでくる

男3　何これ
男1　〇〇だ
男2　何で〇〇が
男3　あそうだ、・・卵！
男2　忘れてた！
男3　割れてない？
男1　一応大丈夫そうだね
男2　にしても危なかったね、今のは
男3　やっぱり暴力的ですよ
男2　デモ？
男3　はい
男1　いやでも、こんだけの人が国家に対して意思表示してるのは、日本じゃありえないよ
男3　たしかに日本に比べたら、いいかもしれないけど
男2　多少、過激だね
男3　うん

男1　…。
男2　…。
男3　…。
男1　…どうする？まだ眺めてる？
男2　いや、もう慣れたからいいかな
男3　慣れるの、本当に早いですよね
男2　慣れるのだけは得意なんだよね、僕たち
男1　これ、何だろ

投げ込まれたものについていた赤いスカーフを
男1がつけると、周辺のフランス人が襲いかかってきた。

男3　あれ、なんかこっち来てません？
男2　え？
男3　あの人、来てますよね、あ、あの人も！
男1　え、俺？あ、俺か
男2　やばいよ、睨んでる！行こう行こう行こう
男3　行くって、どこに
男2　どこかだよ！早く乗って
男1　人のタクシーで逃げる3人

男1　3人が逃げ込んだのは、場末の定食屋
フランスにはきっと場末なんて言葉はない

定食屋も飲み屋も旨くて心地よければそれでいいのに。
場末と言ってしまう姿勢には、
どこか他人への謙遜というか見栄が表れている。
なんていう価値観もフランスにはきっとない。
場末なのにやっていけてる素晴らしいレストランで
ガレットを食べながら、3人

男3　どうするんですか
男2　え？
男3　いや、とりあえずここに来ましたけど
男2　うまいよなガレット
男3　うまいよな、じゃなくて
男2　うまいだろガレット
男3　そこ戦ってこないでください。
男1　ここでいいのか。って話だよね
男2　なにが
男3　こいつの生まれる場所

卵を見る3人

男2　日本に比べたらいいよ、全然
男1　そうだよな。あれだけの人があれだけ意思表示できてる国なんだから
男3　じゃあここにする？

男１　そうだね
男２　母国語がフランス語ってなんか羨ましいよね
男３　どうして日本人はヨーロッパをリスペクトするのに、それ以外の国はリスペクトしないんでしょうね
男２　日本人って君だって日本人だろ
男３　母国語が日本語なだけです
男２　俺だって気持ちはそうだよ
男１　よくさ、どこで生まれても一緒だよ。お前次第なのに、努力が足らないんだよ。みたいなこと言われるんだけどさ。絶対違うよね。
男３　うん
男２　生まれる場所は選べないからね。生まれた後移動することは出来ても
男１　いいんじゃないかな、ここで
男３　もの投げてきたり、ちょっと暴力的だけど
男２　それはそうだけど、まあでも自由が与えられてるってことだから
男１　フランスなら殺されないですよね、こいつフランス人は食べないから
男２　そうだね、フランス人は食べないから
男１　本当に日本人だけを食べるんだよな
男２　うん
男３　そこなんですけど観光客はどうなるんですか
男２　え、フランスって観光客多いんだっけ
男１　ダメだ、多いよ
男２　えー
男１　フランスはダメだ

「フランスはダメだ」という言葉に反応した

フランス人が聞き捨てならないといった感じで
絡んでくる

男２　フランスの何がダメなんだ
男３　え
男２　何がダメなんだ？日本人、言ってみろ
男３　って言ってますよね
男１　日本語上手ですね
男２　それ褒めてないからな
男３　フランスにもいるのか
男２　何が、フランスにもいるって？って、なんでお前は真似してるんだ
男２　日本では、こういうのをオウム返しって呼んで、幸せになれるとされているんです
男３　へえ
男１　へえってそんなわけないだろ
男２　お前ら日本人は、卑怯だよな
男１　卑怯？
男２　そうだ
男３　どのあたりが卑怯だと思うんですか？
男２　考える頭もないんだな
男１　どこで覚えたんだよ、その言い回し
男３　何が卑怯なんですか？
男２　とくに卑怯なのは戦争だな。お前らは戦争に行かない
男１　戦争？

男2　俺たちの国やアメリカや他の国が戦場にいるとき、お前らはどこにいた？
男1　まだ生まれてもいなかった
男2　そういう話をしてるんじゃない。あの戦争もそのあとの戦争も、お前らはあの島にいたんだ。お前らは人をよこすことも、物をよこすこともせず、金だけを送って引きこもってたんだよ
男3　見方は色々ありますから
男1　かばうのか
男3　かばうとかじゃなくて
男2　俺はお前ら日本人が、許可なくこの国に入れているのがおかしいと思っている。
男1　日本人は余計なものを持ってきては、それを売って帰っていく。そうやって得た金を払っては戦争を避ける。
男2　避けられない戦争を加速させるのはお前たちの金だぞ
男3　そんなこと言われたって
男1　どうせまたよからぬことを考えてるんだろ。日本人の表情は相変わらず気持ち悪いな、目がちっとも笑わない。
男3　・・・。
男2　・・・。
男1　・・・。
男2　無視か。無視をすれば諦めて帰ると思ったら大間違いだ。私はこの店からお前が出るまでお前を罵倒する。同じ店にいることが不快だ。お前といるとワインの風味が落ち、ガレットの舌触りが悪くなり、シードルの香りは消え、電波の調子が悪くなる。
男3　・・・・。
男2　おい、どこにいく
男3　外です。
男1　追い出したということは、私の勝ちだな

男3が店の外に出るのにつづいて

残りの２人も外に出る

２人　あ、どうしたどうした。
男３　なんで？
男２　ごめんごめん楽だったからオウム返し
男１　そのまま話すだけだもんね
男２　でも、よくなかったかな
男１　それはそうだよ、僕らだってこれまで隣で普通に喋って奴らが急にオウム返しし始められたら意味わからないもん
男３　じゃなくて、なんで誰も気づかなかったの？
男１　気づくって？
男３　日本人は戦場にいない
男２　あー、たしかに言ってたねあいつ
男１　そうか、戦場か
男２　戦場ならナンバンウバンバンの卵、生まれられるな
男１　うん、殺処分対象になることもなく生まれられる
男３　生まれる。
２人　生まれられる。
男３　生まれる
男１　早くいかないと、
男３　え？
男２　うん、なんだか戦場って行くのに時間かかるイメージがあるから
男３　でも、行くって。どの戦場に？
男２　一番規模の大きい戦場でいいんじゃない？

男１　え、理由で選ばない？何で戦ってるのかとか
男３　理由なんてぐちゃぐちゃに決まってますよ。
男１　でも、規模の大きさで選ぶのも違うよね？
男２　そう？
男３　うん。
男２　じゃあ、一番近いココに行こうか、規模小さそうだけど
男３　じゃあ、そこで
男１　卵が生まれる戦場に行く３人

男１　仮にも戦場に行く。となってから、
この ト書きにも意味が生まれ始めた
もし、仮にも、私が死んだら。
私の死はドキュメンタリーではなく
劇の ト書きとして消費される
３人は卵を抱えフランスから飛行機に乗り
降りたところで軍用トラックを見つける
積み荷とともに道なき道を進む
景色が単調になる。戦いの音はまだ聞こえない
卵を抱えた３人は戦場に行く
私は３人のうちの一人

男２　それはもうモノローグじゃない？
男１　わ！覗き見しないで

男３　僕ら、飛行機にもまだ乗ってないじゃないですか
男２　それな
男１　筆が乗っちゃって
男２　他のところでそれやってないよね。
男１　やってない
男３　あ、ちょっといいですか
男１　え？
男２　あ、はいはい
男３　え、それではこれから我々を戦場まで案内してくださる現地ガイドのくれたガイドをご紹介します
男１　え？現地ガイドのくれたガイド？
男２　現地ガイドは？
男３　ここから、戦場までのルート、それから注意点がかかれているみたいです
男２　全部紙に書いてあるんだ
男３　読み上げます。「戦場へ向かう皆さん、こんにちは。
３人　こんにちは
男３　皆さんが何とか戦場にたどり着く。この手紙がその一助になれば幸いです」
男１　めっちゃくちゃ丁寧だね
男２　これからどうするって書いてある？
男３　まず皆さんはこれから山を二つ越え
男１　え？
男３　それから川を三つ渡り
男２　うわ、川を
男３　さらに海も越えてもらいます

男1　…
男3　戦場に行くためには仕方がないんじゃないですか？
男2　何か乗り物はないんでしょうか？
男3　「私が何の乗り物もない国で生まれていたとしたら、きっと乗り物がなくても不思議には思わない」ってないってことだな
男2　3人はまず山を二つ越え
男1　それから川を3つ渡り
　　最後に小舟で海を越えた。

男2　あと、どのくらい？
男3　ガイドにはあと9.6マイルくらいって
男1　それって近いの？
男3　近づいてきましたが、ここからが危険です。とも書いてあるから、近いんじゃない？
男2　どう危険なの？
男3　えー、あなたたちはどこの国の人ですか？
男1　…日本です
男3　あ、やられました。
男1　え？
男2　何？急に。
男3　（現地ガイドのくれたガイドを読みながら）ここからは、日本人であることがバレると死ぬそうです
男2　え
男2　どういうこと？
男3　日本人だと分かるとすぐに撃たれるそうです

男1　どうして
男2　日本人が嫌われているとか？
男1　僕らだって嫌いだよ。
男2　僕らが日本をどれだけ嫌おうが、向こうから見た僕たちは日本人だから
男1　中身評価してほしいよね
男3　「絶対にここから茂みまでは日本語を喋ってはいけません。それから、日本人っぽいことをするのもいけません。」だって
男1　絶対に。って怖いね
男2　日本語しか喋ったことないんだけど
男1　英語は？
男2　え、英語なんて無理だよ
男3　でも、日本語を話さないで他の言葉を喋ってください。日本語から逃げて。って書いてあるよ
男1　何とかするしかないんじゃない？
男2　え、ボーディラングエージ？
男3　僕もう大丈夫なんで。
男1　じゃあ行こう
男2　えっちょっと待ってよ

男1　The three men continue to walk to battlefield
3人は戦場に向かって歩き続ける
The more they walk the bigger sound of bombardment.
彼らが歩けばあるくほど、砲撃音は大きくなっていく

男2　ビビンバ

男3　アクアパッツァ
男1　Hey Why do you say food?
男2　パンナコッタ
男3　ペスカトーレ
男2　チャプチェ
男3　カルパッチョ
男1　It is difficult for us to speak in foreign language.
男2　Hey!
男1　Hi! What wrong ?
男2　・・・トルティーヤ
男3　チャンジャ
男2　ボルシチ
男3　パエリア
男2　ラタトゥイユ
男1　I am afraid to born for the egg.
男2　エッグベネディクト・・・?
男3　オムレツ・・?
男1　We could remember food names.
男2　ガパオライス・・?
男3　ナシゴレン
男1　But we forgot roots of food.
男2　ケランチム
男3　マフェ

男1　Food is great!
男2　ケバブ
男3　You are a poor English speaker.
男2　ハムムマッハシ
男1　Pardon my broken English.
男3　寿司
男1　え?
男2　HEY!

男1　There are sushi with soy source and chocolate source
そこには寿司と醤油とチョコレートソースがある

男2　What is it?
男1　It is　sushi.
男2　sushi? I don't know sushi. Because I am not Japanese
男3　It is trap.
男2　Trap?
男1　Trap?
男3　Yes. Anyway let's eat.

男1　Two men dip sushi into chocolate souse and　eat it.
2人の男は寿司をチョコレートソースに付けて食べた

男3　Hey! Hide in bushes！
男3　この茂みに入ればもう大丈夫です
男2　気持ち悪いね、寿司をチョコレートソースで食べるのは
男3　そりゃそうだ
男1　これもし、寿司を醤油で食べていたら、どうなっていたんですか？
男3　間違いなくやられてたよ
男2　本当かよ
男3　ほらここに醤油をつけて食べた人の写真が載ってる
男1　ああ、かわいそうに
男2　…チョコレートはないよな
男1　…だいぶ音が大きくなってきたね
男2　あと少しだ
男3　ここを抜ければ、戦場。って書いてある
男2　やっとだね
男1　うん、やっと生まれる。
男3　私が案内できるのはここまでです。ご武運を祈ります。
男2　え。
男3　ここからは3人で頑張ってください。
男1　え、終わり？
男3　終わりみたいです。
男2　あ、終わりなんだ
男1　現地でガイドしない現地ガイドなんているんだね
男2　確かに

男３　どうでもいくないですか？卵が生まれれば、そんなこと
男２　確かに
男１　そうだね
男３　日本にほったらかしていたら今頃こいつどうなってたんだろう
男２　ぜったい殺処分だよ。生まれる場所に殺されていた
男１　あいつらもそうだよね
男３　あいつらって？
男１　ほら、病院の
男２　赤ん坊たち？
男１　ナンバンウバンバンに比べたら、大したことないかもしれないけどさ、
男３　いや、不安です。あの子がどうなるのか
男１　あの子
男３　僕が段ボールに入れていた子の話です
男１　ああ。
男２　きっと、嘆いてばかりじゃなくて、将来を変えなくちゃいけなかったんだろうけどね
男３　変わんないもんね
男１　みんな、いまのままで全然幸せなんだと思うよ
男２　うん
男１　生まれる場所を間違えたと思うしかないんだよ、やっぱり
男３　ちなみに今、日本に帰りたい人います？
男２　え
男１　ここまできて？
男３　戦場って怖いじゃないですか？てか、ここもだいぶ戦場なんですけど

男2　いや、俺は卵が生まれるまではどこにも行かないよ
男1　うん、この卵には生まれる場所で不幸になってほしくないから最後まで見守りたい。つっても戦場だけど
男1　でも平等だよね。誰が死んだっておかしくないって
男2　それ平等なの？
男3　ここで生まれる子のことを考えたら平等もくそもないですよ
男1　たしかに。最悪だねここは戦場だ
男3　じゃあ、向こうに行きますか
男2　さいごにあのさ、
男3　何？
男2　今、日本に帰りたい人？
男1　え？さっきやったじゃん
男2　さっきは目開けてたから目瞑ってもう一回、瞑った？はい、帰りたい人手挙げて

男1と男2は手を挙げる
砲弾の音がさらに激しくなる

男1　聞こえる？僕の声
男3　聞こえるよ
男2　聞こえる
男1　よし、じゃあ行こう
男2　うん
男1　３人は茂みを抜ける。抜けた先は広い平原になっていて、木も草も生えていない。
３人は途方もなくまっ平になっているそこを走る。走れど走れど実感がわかないくらいまっ平だった。大量の土埃と砲弾の音が聞こえる。

男1　卵大丈夫！？
男2　大丈夫そう
男3　・あれは右足ですか、左足ですか
男2　・左腕じゃない？
男1　・全部ある、右腕も左腕も右足も左足も
男2　・・数え切れないね
男3　場所どうする？
男1　ここにしよう
男2　わかった、あっためよう
男3　うん！
男1　・お母さんってこういう気持ちなのかな
男2　え？
男1　お母さんって！こういう気持ちなのかな！
男3　え？
男1　何回も言わせないでくれる？
男2　どんな顔してるんだろうね
男3　爬虫類顔
男2　それ爬虫類にむけて使うなよ
男1　きっとお母さんに似てるよ
男2　お母さんどんな顔だったっけ？
男3　えーっと、ダメだマグカップの先生の顔しか出てこない
男1　きっと、いい顔してるよ

男２　・・・。
男３　・・・。
男１　・・・これいつまで待つんだろ
男２　いつまでも待つって言ってたじゃん
男３　生まれるまで待とうよ
男１　戦場で？
男２　戦場じゃなくてこいつの故郷だから
男３　故郷
男２　繰り返すのやめて
男１　ここでよかったのかな
男２　え
男３　どうしたの？　気持ちだけお母さん
男１　いやー、ここでよかったのかなぁって
男２　あ！動いた！
２人　え！？

男３　見ると卵には少しヒビが入っている。もう少しで生まれる。こいつはここに生まれる。その瞬間、脚本家の体が飛んだ。

男１　おかあさん

男３　脚本家の最後の言葉もお母さんだった。
私は右腕が飛んでしまった彼に代わってト書きを書いているが、どうしても文字より先に声が出てしまう

男２　ああ！おい！おい！おい！！！！！
男３　ああ・・・動かない、
男２　一旦忘れよう
男３　忘れる？
男２　うん、もう少しで生まれるんだ。今は集中しよう
男３　わかった。でも
男２　でも、もう少しで生まれるんだ
男３　ほんとだ、殻が割れ始めてるぞ

男３　彼はやはり動かない

男２　…残念だったな、あいつ。生まれるの見れなくて
男３　あのさ
男２　ん？
男３　こいつが生まれたら俺らは食べられるのか？
男２　日本人だからな
男３　そっか
男２　うん、こいつが生まれたら全部終わりだ
男２　・・・あ
男３　生まれる？
男２　うん！生まれる生まれるうまれるぞ！
男３　うん！
男２　がんばれー！

男3　がんばれーー！
男2　がんばれ！！！
男3　生まれろ！がんばれ！
男2　おめでとう！
男3　ついに卵からナンバンウバンバンが生まれる！その瞬間、生物学者の頭がガシャーン！と食べられた。ナンバンウバンバンはその頭を数度噛み飲み込む。それから体も食べ始める。最初は首からあふれる血を吸い、それから肩甲骨を噛み、段々と上半身を食べていく、唾液で砂がたっぷり着いた下半身を食べていく。ちらっとこっちを見ながら、足をうまそうに食べる。もう残っている部分以外、何も残っていない。さいごに靴を吐き捨てるとそこにいはずの男はいなくなった・っておい！俺を早く食べろよ！
ナンバンウバンバンは視線をこちらに向けず動かなくなった脚本家の方へ向かう。のそのそと歩いて、素早く食いつく

男3　飛んだ脚本家の右腕を食べ始める。それから動かなくなった彼に近づき、また頭から食べた。先ほど同様、ぐしゃぐしゃと、時にガシャーンという音を立てて骨を砕く。次第に脚本家の存在は戦場から消え、彼の書いていた脚本だけ僕の手元に残った。
っておい！俺を早く食べろよ！

男3　・・・ナンバンウバンバンはゆっくりと歩きながら戦場を後にする。
っておい！俺を早く食べろよ！

男3　・・・日本人の彼が残した脚本に登場するのは3人の男だった。一人は脚本家を目指しているフリーター、もう一人は生物学者を目指しているフリーター、そしてあと一人は、わが子の身を案じて段ボールに入れた赤ん坊を親族のいる国に送ろうしていた男。3人とも日本語で会話する日本人と書いてある。

男3　ナンバンウバンバン、どうして僕を食べないんだ

男３　君は知らないかもしれないから、どうして僕が日本人かを話すけど、僕はまず日本に生まれた。両親も日本で働いていて、僕の第一言語は日本語だ。けれど、とある日本人たちは僕らや僕の家族や友達や友達の子を怖がらせたりしたあげく、日本から出ていけって言うんだ。日本で生まれたのに。おかしいだろ？・・・おい返事しろ爬虫類顔。
僕は僕を敵視してくる日本人の行動の意味が分からないし、怖い。
でも僕が日本に生まれたってことは、僕は日本の人なんだ。て思った。もちろんそうじゃない友達もいる。もちろん国籍を変えることも出来るけど。
そういう話をしてるんじゃない、僕は自分が生まれた土地で自分らしく生きたいだけなんだ。認めてくれ。君が僕を食べることによって。胃の中で２人と合わせて溶かしてくれ。

男３　と、僕は言った

男３　それから、ナンバンウバンバンは私を置いてどこかへ消えていったので、僕の周りには何もなくなった。

男３　唯一残ったのは、手元にある彼の脚本。

男３　ここに帰ってきた私は、彼の脚本を読んでいる。私がどんな状況にあるかをいくら書いても、皆にとってそれはト書きではなく未だモノローグだ。あの日、見てきたことを話す私とそれを聴く観客の間にある透明な壁。この壁がなくなって、
ここにいる誰もが、ナンバンウバンバンに食べられる日を、胃の中で彼らに再会できる日を、新生児室から願って。
この脚本は終わります。

完